



半纏に刺しゅうを施す女性

「南郷刺し子」の特色は、対象が半纏であること。2本取りした糸を使い、縁起が良い模様（麻の葉・亀甲・七宝・柿の花・山道・枳など）を描いていきます。全面にさまざまな模様が散りばめられた半纏は、全国的にも珍しいもの。時間をかけ作り上げた一張羅は、芸術の域にまで達するものもあり

半纏を見せ合い 技術を競い合う

の文化が広く知られていますが、発祥については諸説あり、定かではありません。



模様が散りばめられた「南郷刺し子半纏」

男性にとって、地域の一大行事である大堰は、刺し子を見せ合いながら、奥さんを自慢する場でもありました。一方で、女性の視点に立てば、自分の技術が他人から評価を受ける場であり、大変な苦労があったはず。それでも、半纏に個性を打ち

ました。完成した半纏は、伊南川から水を引く大堰や、道普請・建前など、主に共同作業の場で男性が着用。大切な晴れ着としての役割もあつたようですが、魔よけなどの意味合いを持つ模様を身に纏うことで、安心して作業に臨むことができたのかもしれない。

厚みのある生地で作られた半纏に、規則正しく並んだ模様の数々。その場にいた会員の誰もが、素朴な美しさに魅了されました。「南郷刺し子」がもたらす驚きと感動を、多くの方に伝えたい。この経験をきっかけに、有志の皆さんによる「南郷刺し子会」が結成されました。

「南郷刺し子」の文化は、一度途絶えた経過がありますが、平成21年を迎え、長い間止まっていた時間が再び動き出しました。当時、南郷地域文化祭を訪れた南郷婦人会の皆さんは、原良江さん（茨城県出身）が製作した「南郷刺し子半纏」を目の当たりにし、衝撃を受けました。

息を吹き返す瞬間

「南郷刺し子」が

出すことで、自分を主張することができる。「南郷刺し子」は、女性にとって、大切な存在であつたに違いありません。奥会津博物館南郷館では「南郷刺し子半纏」を展示していますので、興味や関心のある方は、ぜひ足を運んでみてください。

暮らしに息づく文化を受け継ぐ 「南郷刺し子」が描くもの



「布と糸」たった2つの素材が、次の世代へ思いをつなぐー

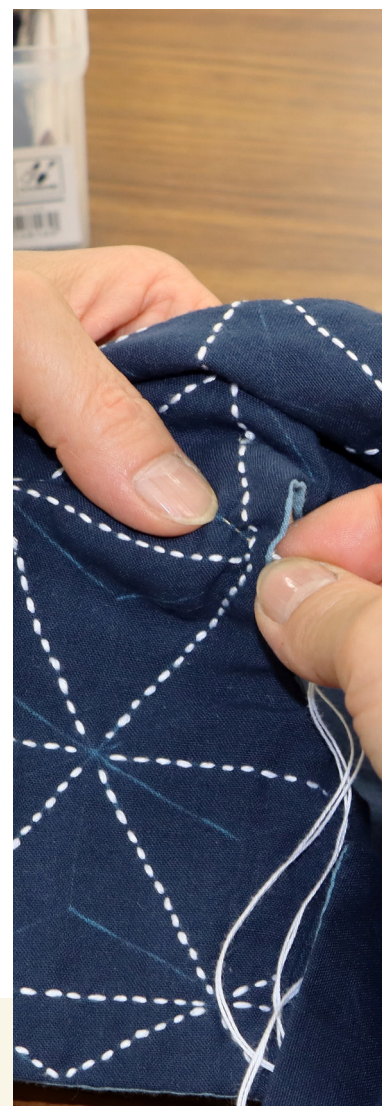
多様な文化が交差し 成り立つ南郷地域

昭和30年、国や県が積極的に推し進めた昭和の大合併を経て、現在の南郷地域（旧南郷村）は誕生しました。合併以前には、伊北郷と伊南郷との境目に位置していた当地域。北から越後の文化、南から関東の文化がそれぞれ流入し、文化が混合する地域として、多くの特色ある民俗事例が生み出されました。中でも注目すべきは、衣生活の分野ーまさしく、刺し子文化。かつては貴重だった木綿の布地を、繰り返し補修しながら、無駄なく大事に利用する生活の知恵。一針一針丁寧に進められる刺し縫いの技術が、母から娘へ大切に

受け継がれていました。今号では、南郷地域を中心に、独自の発展を遂げた刺し子文化「南郷刺し子」に着目します。

東北地方に色濃く残る 刺し子の文化

そもそも刺し子とは、日本に古くから伝わる伝統的な刺しゅうのこと。藍色をはじめ、濃い色で染められた木綿の布地に、白い糸で線を描くかのように、模様を施します。刺し子の誕生は、16世紀初頭とも伝えられています。世間一般では、厳しい寒さをしのぐために、防寒や補強の一環として、衣類に刺しゅうを施した、東北地方



南郷刺し子で用いられる 代表的な模様をご紹介します



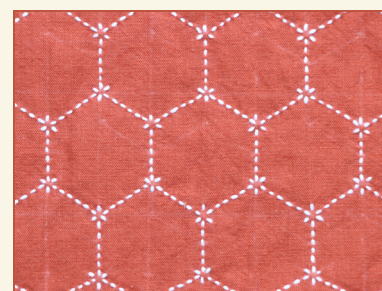
■ 柿の花（かきのはな） 実を結ばない柿の花はないことから、五穀豊穡や防虫など、生活に寄り添った意味合いを持つ



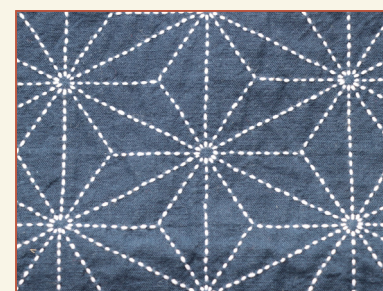
■ 七宝つなぎ（しっぽうつなぎ） 無限に連鎖する輪の様子から、人との縁や関係性が末永く円満に続くことを意味する



■ 野分（のわき） 野分は「嵐」を意味する言葉で、野に生える草を強い風が吹き分けている様子を表す



■ 亀甲（きっこう） 長寿吉兆の縁起物とされる亀の甲羅を表し、崩れず連続する様子から、繁栄の継続を意味する



■ 麻の葉（あさは） 成長の早い麻のように、子どもたちの健やかな成長を願うもので、魔よけの意味合いも持つ

「南郷刺し子会」の会長である馬場純子さんは、刺し子半纏に「ぼろ接ぎ」という暗いイメージを抱いていたと話します。貧しい、寒い、苦しい―辛い時代を生きた女性たちの手仕事程度にしか考え

「南郷刺し子」を「つなぐ」役割

します。ただ、作品が仕上がったときの喜び・充実感・達成感は、計り知れないもの。南郷刺し子の醍醐味の一つです。



1歳を迎えたお子さんに贈呈する赤ちゃんベスト

ていませんでした。しかし「南郷刺し子半纏」と出会ったとき、自分の考えが誤りであったことに気付きます。家族の健康、繁栄、安泰を願ひ、一針ずつ丁寧に描かれた模様は、深い愛情に裏付けられたもの。多様な暮らし方が提唱され、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中で、人間関係はさらに希薄になっていく。現代を生きる私たちが忘れてかけている「何か」を「南郷刺し子」が教えてくれているのかもしれない。私たちが、絶えず技術を磨きながら、先人たちが残してくれた伝統や業績、生活の知恵を、現代につなぐ。そして、交流の輪を広げる―南郷地域のこれからの一緒に描いてみませんか。



「南郷刺し子会」の皆さん



【南郷刺し子会に関する問合せ】

南会津町振興公社 南郷支局
電話 0241-72-2220



近藤 幸子 さん (鶴巢)

針仕事が苦手だった私も、いつの間にか南郷刺し子の虜になっていました。生まれてくる子どもたちに赤ちゃんベストを贈り、健やかな成長と一緒に見守っていきたい。人とのつながりを大切にしながら、南郷刺し子と向き合っています。



齋藤 奈美 さん (上山口)

幼い頃から手仕事が好きで、ものづくりに興味を持っていました。南郷刺し子会に加入して10年。仲間たちから良い刺激を受け、楽しく活動ができるおかげで、生活にも張り合いが生まれています。一緒に活動いただける方をお待ちしています。



馬場 純子 さん (下山口)

南郷刺し子の原点は、古いものを大切に利用しようとする気持ち。私たちの手で、古布に新しい命を吹き込むことに、大きな意義を感じています。南郷刺し子の輪を広げ、皆さんと一緒に、新しい価値観を作り上げていきたいです。



【写真⑤】

毎月1回のペースで、刺し子教室を開催（南郷総合センター）

伝統文化を次の世代へ
模索を続ける日々
平成22年の結成から、11年目を向かえた「南郷刺し子会」。町内のみならず、金山町や郡山市、北関東、首都圏に至る幅広いエリアに20人を超える会員がおり、これまで32枚の半纏を製作しました。

新型コロナウイルス感染症の影響で、全員が一堂に会することは困難な状況にありますが「日常生活のリズムを崩さず、自ら時間を見つけて刺し子に励む」ことを信条に、楽しみながら活動を続けています。また、刺し子文化を傳承していくためには、固定観念にとらわれず、幅広い価値観に対応しなければなりません。半纏を中心とした文化を維持しつつも、若い世代が手を伸ばしやすいアクセサリーや小物に、刺し子の要素を取り入れるなど、新しい挑戦を続けています。

地域の伝統が
お子さんを包み込む

「南郷刺し子会」では、南郷地域に住所を持つお子さんが1歳を迎えたとき、赤ちゃんベストをプレゼント。これは、お子さんの健やかな成長に加え、ご家族の健康を願うもの。活動を開始して以降、贈呈したベストは35枚にも上ります。シンプルな工程ながらも、完成までには、多くの時間と労力を要